大学自己組織化への一步 — 直交系列制の提案 —

The first step for self-organization of Universities in Japan
— A proposal of matrix structure —

沖 野 教 郎[※]

Norio OKINO

1. 大学の形骸化

北海道大学百年記念館には、新渡戸稲造、佐藤昌介、宮部金吾など創設当初（札幌農学校時代）の学生で、後にそれぞれの分野で指導的役割を果たした大先輩のノートが展示されている。英語できちょうめんに書かれたノートから、その当時の学生の熱気が伝わってくる。外人教師の一言一句をも聞きもらすまじと知識欲にはちきれんばかりの教室風景を想像できる。

目を移して壁面に工学部創設の頃の若き教官達の写真を見る。ロンドン、テムズ川に浮べたボートの上で学部将来構想を練る会議風景である。そこには研究の、あるいは教育への情熱が生み出す目の輝きがある。

日本の歴史ある大学はすでに100年を経過している。その間、大学はその形態において本質的变化はほとんどないままに推移してきたが、その中味において大きく変化している。もはや教室にはかつて存在したであろうような情熱は失われている。大学の活力は消失し

今や最低のエネルギー水準に落ち込んでいる。いちいち挙げることをしないが大学がかかえる難問は数限りない。これらを解決出来ないまま閉塞状態にある。

大学にこのような状態をもたらした元凶は100年間変化のないまま現在に至った大学の形態そのものにあると考えられる。この100年間社会も学問も大きく変化しているにもかかわらず大学だけが変化しなくても良いはずはない。確かに大学や学部、学科の新設はあったが、それらも旧来のパターンのままであり、組織の再編なしに新設だけで対応出来るはずのないことは自明である。

学生は先端科学技術の各分野に興味をもち、それらの一つを深く修めたいと希望する者が少なくない。自らの学びたいものを学ぶことが学問への情熱の原動力であるが、実際には旧来の固定化された学科とカリキュラムの中に否応なく割りつけられ、失望を味わいながら勉学しなければならない。最近の偏差値による輪切り現象はこの傾向に拍車をかけ、大学を通過駅化する。

一方教師の側も、自分のやりたい研究を行い、教えたいことを教えるのが情熱の根源である。たとえ義務として教えねばならない場

※ 北海道大学工学部
Faculty of Engineering, Hokkaido
University

合でも学生の知に対する目の輝きが頼りである。現状のシステムの中でこのようなことを望むのは夢物語でしかない。

教育のほかに大学の果している研究面での役割は大学人の集団の量からいって極めて大きいはずである。しかし、現実には企業の大学離れという現象が起こっている。大学の研究を余りあてにしくなっている。これは企業が相対的に研究力をつけてきた結果であるが大学組織の固定化が大学の研究面での活力増大にもブレーキをかけていることは事実である。

このような大学の現状を例えて言えば、かつて内部の活力で膨らんでいた風船が年月の経過とともに内圧を失ったが、外皮だけは風化して硬くなったまましばむこともなくその形を保っているようなものであるとするのは余りに言い過ぎであろうか。とにかく大学の形骸化がその極に達していることだけは確かである。

2. 大学改革の視点

大学改革が容易でないことは大学人であれば誰でも知っている。大学が死にかかっており下手な手術をすれば死んでしまうかも知れないと恐れる気持もあるが、むしろ大学のしたたかさがどのような薬も受けつけないのではないかとの思いが強い。何をやろうとしても何も出来ないだろうとの思いが先に立つ。

実際今まで如何なる改革も受けつけないという実績がある。遠くは軍国主義の嵐が吹き荒れた時代、近くは大学紛争の時にも大学はほとんど変化していない。学問を守る意味でこのことは有益であったかも知れないが逆に積極的変革に対しても動かないことが予想される。

このような大学に対して強力な外圧を期待

する向きがある。臨時教育審議会が思い切った改革案を打ち出し、その外圧によって大学が変わると期待されている。しかし、上に述べたように外圧によっては大学を変えることは出来ない。もし出来たとしてもそれは大学の死を意味する。

大学改革といえば誰もが大学の組織を変えることを発想する。しかし、大学の自治という聖域が存在する以上大学に如何なる制度を押しつけても自分でこれを変更し、自分達の組織にして再生する。例えば講座制を考えてみよう。現在制度上講座制の敷かれている大学は少数である。多くは学科目制あるいはこれに準ずる制度が敷かれている。しかし、実際には国公立を問わず大学の多くが講座、あるいは同種のグループを単位として運営されている。

そしてそのような事実上の講座がそれぞれ独立し、これが集約されて教授会自活を構成する方式はその本質において非管理制である。これに対して管理を強化しようとする考えもあるが、大学の活性化にはマイナスに作用するであろう。大学人は学問の自由を最高のものとして生きているので、およそ管理と名のつくものには本能的に反発する。人にやらされるのではなく、自発的に行いたいのである。管理の強化は大学を殺してしまうことにもなりかねない。

すなわち、ここで言いたいことは大学改革の視点を大学の組織をいじるとか、組織の管理面に向けるべきではないということである。すなわち、どう変えるかということよりも、どこから手をつけるか、どこに糸口を求めるかが重要である。そして、あくまで学問の自由とそれを守るための大学自治の原則を前提に大学の自己組織化をうながし、これを大学活性化に向けて展開させるようにする方策が

求められねばならない。

3. 大学活性化の一步、直交系列制の提案

表題に示した具体的提案を急ごう、しかし、その前に強調しておきたいのはここでの提案は制度や組織の改革を提示しようとするのではなく、前項を受けて自己組織化をうながすための方策であり、改革の糸口を提案するものである。図に示すように、従来の並列的学科構成に直交する研究系列を新たに設ける。ただし、当初から全体の構成を考えて設置するのではなく、直交系列制を先に制度化し具体的研究系列は内部でまとめ次第順次設置し、必要に応じて改廃する。すなわち研究系列の設置を自己組織化の呼び水にするのである。

直交系列マトリクスの構成要素は講座であり、関連の講座をもって一つの研究系列を構成する。従来の専門分野、例えば数理計画、材料工学、流体工学などをもって構成するもよく、最近の新しい学問分野、例えば知能・知識工学、生物工学、CAE (Computer

Aided Engineering) などをもって構成することも出来る。

一つの研究系列が新たに設置されれば、共同の研究室、実験室の新設や最近の設備のための予算措置が講ぜられねばならない(研究系列センター)、プロジェクト研究や産学協同研究の場ともなり得る。

一方教育系列は学科を現状のまま系列とするが、将来研究系列が充実した時点で学科を再編成する。直交系列制の最も重要な特徴は学科に横断的に架けられた研究系列という橋を通じて、学科の新設、拡大、縮小を可能にする点にある。すなわち、研究系列は研究のためだけでなく、教育の分担者としての役割を果たさねばならない。学科のカリキュラムの一部を研究系列が実施する。換言すれば各研究系列は各学科のその専門分野の講義の責任を持たねばならない。このようにして教育系列の固定化を脱し、大学に自由な学科編成の道を開く。

両系列の運営方法など実際となると細々した問題が多数発生するであろうが、これらを内部で検討すること自体が大学活性化への道に通ずるはずである。

あとがき

編集委員会からの依頼は臨教審へ現場からの提言ということであった。この小文は直接の提言にはなっていないが、京都大学で12年、北海道大学で19年、研究・教育にたずさわり、かつその間内外の多くの大学を見聞し、感じて来たことをまとめてみた。ただし、これはあくまでも純粋に私見であり、かつ一般論である。京都大学や北海道大学のことを書いたのではないことをはっきりさせておきたい。

— 直交系列制の提案 —